

京丹後の暮らし

岸上 克

2018 年度入学 鈴木ゼミ 2 期生

1. はじめに

京丹後に興味を持ったのは大学一年生の夏である。その頃私は、シェアハウスとして改修された京町家に住んでいた。おかげで自然と古民家での生活や、文化に興味が始まった。その後、寺社仏閣の見学や各地の暮らしを見るために旅をし、中でも岐阜県の白川郷、伊根町の舟屋、新潟県の古民家など雪の多い地帯によく足を運んだ。場所が違えば住む人も違い生活も異なる。土地や人の変化を見るのが私なりの旅の楽しみかたである。

京丹後の旅では、人と人の繋がりや強さ、その繋がりを持つ可能性を感じた。旅の途中で京丹後市民の集会に参加させていただいた。私の勝手な想像であるが、「集会」というと地域の長、または自治体が主体となり、何人かの代表だけで時々行われるものだと思っていた。しかし、全く想像とは違い老若男女、LGBTQ 関係なく非常にオープンな集会であった。京丹後の未来について農家経営者、薬剤師、高校生、教師、ゲストハウス運営者など、さまざまな職種の人々が同じ目線で、違う角度から考え意見を合っており、自治のあり方について改めて考えるきっかけになった。

私は京丹後の持つ自然や歴史的背景、住民の温もりに魅了されすっかりファンになった。今回は私が見た丹後について私自身が撮影した町並みとともに書こうと思う。



2. 海の京都

京丹後は日本海に面しており、牡蠣の養殖や天橋立など海の恩恵をかなり大きい。久美浜湾は砂嘴（さし）によって日本海の波の影響は少なく、年中穏やかで牡蠣の養殖に向いている。周辺には、牡蠣を提供している牡蠣小屋があり新鮮で肉厚な牡蠣を食べることができる。海の幸が豊富に漁れる久美浜湾を眺めるのに最適なのが兜山である。標高 191.7m の兜山からは、



鮮やかな翠色の美しい久美浜湾を一望できる。兜山は流紋岩の溶岩からできており、久美浜湾から見るとその特徴のある兜状の形が見られる。ここ兜山で毎年8月9日に「千日会」が行われ、花火の打ち上げや、兜山の中腹に「大文字」のかがり火が点火されるなど夏の夜空を美しく彩る。写真は兜山から見た久美浜湾の景色である。

3. 京丹後の歴史にふれる

京丹後市には令和3年度現在、約53,000人が住んでいる。京丹後市には、江戸時代に発祥した絹織物「丹後ちりめん」や、墳墓や古墳が多く残っており歴史がある地である。現在もたくさんの重要伝統文化財が保存されており、行楽シーズンには多くの観光客が訪れる街である。

久美浜町には「豪商稲葉本家」の母屋は築130年で国登録有形文化財がある。豪商稲葉本家はその名の通り莫大な富を持つ稲葉家の豪邸である。江戸時代この久美浜の地で糶製造によって得た富で廻船業を営み沿岸交易によって成長したと記録されている。



4. 京丹後に残る伝説

丹後半島には数々の神話や伝承が残っている。昔話で親しまれる「浦島太郎」や「天女の羽衣伝説」は、丹後がルーツであると言われている。

羽衣伝説自体は日本各地に数多く残っているが、和銅6年（713年）に編纂が命じられた丹後國風土記に記されているものが「文字として残された日本最古の羽衣伝説」と言われている。

丹後に残る天女の羽衣伝説を説明すると、磯砂山（いさなごさん）の山頂にある池に8人の天女が水浴びをしていたところ、その近くの里に住むおじいさんが天女の着ていた羽衣を隠し、「私には子供がいないので、羽衣を返す代わりに私の子になってほしい。」と天女に頼む。天女はその言葉に従い、羽衣を返してもらい老夫婦とともに暮らし始める。天女は酒を作るのが上手で、その酒の評判もよく老夫婦は瞬く間に大金持ちとなり、里も豊かになった。しかし、10年ほど経つと老夫婦は「お前は私たちの実の子ではない。でて行ってくれ。」と天女を追い出し、行く宛のなくなった天女は村を点々として奈具の村で鎮まったという話だ。天女がとても不憫に感じた。



5. 京丹後の食について

京都府の最北端に位置する京丹後地方。日本海に面しているため海産物が非常に新鮮で美味しい。その魅力を少しでも発信できるように旅の途中で食べたものを紹介する。

フグの白子天ぷらである。友人と旅をしていて、「晩御飯は寿司がいい。」と意見が一致したため入った鮎処でいただいた。1日目に贅沢をしすぎではないかと罪悪感があったが、一口食べるとその罪悪感すら忘れてしまった。大将曰く「人は美味しいものを食べたとき、無意識に微笑んでいる。」らしいが、その通りだった。

他にも京丹後は砂地であるためサツマイモやメロンなども非常によく育つそうだ。京丹後に行った際はぜひ食べてみて欲しい。



6. 京丹後の環境問題

何度も書いているが丹後地方は日本海側に位置する。日本海は波が荒く黒々とした波を想像していた。しかしイメージとは違い、美しい翡翠色をした海面と、岩とぶつかり高く上がる飛沫からは凄まじい生命力を感じ、私は今まで見た海で一番美しいと思った。風が強く全国からサーファーもいい波を求めて海岸に集まる活気のある海だ。

しかし、美しい浜にゴミが散乱している。海を楽しむサーファーたちが自ら海を汚すとは思えない。私は一つのペットボトルを手にとった。そこには日本語ではないラベルがついていた。なぜこんなところに海外のペットボトルがあるのか不思議だったが波打ち際に集まるゴミを見てようやく理解した。ゴミは海を渡るのである。

他国の捨てたゴミが京丹後まで流れ着き、景観を残念にしていることに憤りを感じた。しかし、調べてみると美しい海を守るためにボランティアや有志でゴミ拾い活動を行なっていることを知り、なんとも言えない気持ちになった。京都府だけでなく世界でゴミ問題を解決し、サステナブルな社会を作ることが今私たちに求められている。



7. さいごに

私の好きな丹後地方について少しでも興味を持ってもらえれば幸いだ。名前は知っているが詳しいことは知らないような土地があれば、ぜひ足を運んでほしい。きっと名前が知られているのには理由がある。コロナウイルスがいち早く終息することを願い、次の旅先を考える。